

# LW受容協力医師制度の展望

## ルポ——「高齢者本人の意思はどうなのか」をさぐりつつ 多摩ニュータウンの高齢者医療に寄り添う

若かった街にも高齢化が進行する多摩ニュータウンで、30年近く、「24時間365日体制」のチームケアを提供し続ける天本病院の明石のぞみ医師。その活動と意思をルポする。



多摩ニュータウンの高齢者医療の  
パイオニア・天本病院

東京・多摩ニュータウンの小田急唐木田駅から歩いて5分ほどにある天本病院は、地域の高齢者医療・介護のトータルケアサービス拠点病院だ。

1980年に開設された当初から、「高齢者本人の意思を尊重し、高齢者にふさわしい医療を提供したい。認知症になっても地域で最後まで過ごせるような支援をした」との思いをずっと追及してきている。そんな天本病院に明石のぞみ医師（62）がやってきたのは29年前。開設して9年目のこと。33歳の若き女医は、聖マリアンナ医大の医局からの派遣という形

だった。

「不純な動機だったんですよ。結婚して子どもが生まれ、まだ小さかったので『勤務は9時5時。自宅から近くて、当直なし』という条件を自分なりに考え、それに合っていたので、ラッキーと思ってきましたんです」と当時を振り返る。天本病院の医局時代は、実母や義母の助けを借りて、なんとか育児と両立させてはいたが、「大学病院で働きながら乳飲み子を育てるのは無理なのかな」との弱気も少し頭をもたげていたところに、タ



医療法人の副理事長と多摩事業部の責任者を兼ねる明石のぞみ医師。受容協力医師には松根敦子・元尊厳死協会副理事長に誘われて2002年から。玄関には地域からの感謝状が掲示されていた(写真上)

摩ニュータウンの高齢者医療・介護のまさに中心・パイオニアとして大きく成長していく。

### 「家族に迎合してると ような医療では」と

一方の明石医師も2016年に天翁会の理事長に就任、その年に東京・阿佐ヶ谷を拠点とする社会医療法人河北医療財団と合併。現在は、その副理事長であり、多摩事業部の事業部長も兼務する。この1年、ここ多摩事業部だけで302人を看取った。訪問診療で111人、訪問看護で57人、天本病院で81人、老健施設で41人など。ほぼ1日に1人を看取っていることになる。

高齢者医療は、常に看取りを伴う。「そこで最も大事なことは？」と問うと、明石医師は「リビングウイイルですね。高齢者本人の意思をどう捉え

けど、ご家族を含めて信頼関係を築き上げていくことが何よりも必要なんだなあ、と実感させられました。その時の経験が、ずっと生き続けているという。

### 年間300人を看取る 地域高齢者医療の中核

1970年代から一大プロジェクトとして住宅開発が進んだ多摩ニュータウンの高齢化は、明石医師がきた1990年当時、すでに見えていて、天本院長からは常々「このニュータウンの高齢化は今後ますます進行する。この街に高齢者医療が無くてどうするんだ。

住み慣れた地域で最後まで暮らしたいという人を支援していくんだ」と言われ続けてきたという。こうした、高齢者が増え往診もあるという「医療環境」ではあったが、明石医師に特に違和感はなかったという。生まれ育った青森・津軽地方で、医師だった父親が僻地医療に奔走している姿を見てきたからだ。ホントは、青森で父の後を継ぐはずだったんですけど、父から『住んでる人が少なくなってしまうから、もう来なくていいよ』って言われましたね」と笑う。

最初こそ「9時5時」の勤務だったが、子どもも少しずつ大きくなり（現在は循環器科の若き女医）、手がかからなくなると、勤務時間の「しぼり」もとれて、天本病院の中核として忙しくなっていた。その天本病院を含む医療法人財団天翁会も、同じ地区に、介護老人保健施設、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、グループホームなど19の事業所を展開し、多摩市内と稲城市の一部を中心とした多

